

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：24302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770121

研究課題名(和文) グリム兄弟編『メルヘン自注』全3版の基礎的研究 協同の実態について

研究課題名(英文) Fundamental Study on the Collaboration of the Brothers Grimm: Especially on their Folk Tale Notes

研究代表者

横道 誠 (YOKOMICHI, Makoto)

京都府立大学・文学部・講師

研究者番号：60516144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：グリム兄弟(ヤコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム)は学際的かつ国際的に活躍した文献学者であった。しかし、彼らの仕事がどのような協同によって進められたのかについての研究は多くない。本研究は、『グリム童話』の注釈(『メルヘン自注』と呼称)とその他の書物(兄弟の共著、それぞれの単著)を比較対象し、この問題に取り組んだ。これをつうじて、兄弟がそれぞれ好んでいた先行するメルヘン執筆者、彼らの法律への知識の違い、翻訳に対する価値観の違い、第三者からの彼らへの評価などが浮き彫りにされた。

研究成果の概要(英文)：The Brothers Grimm (Jacob Grimm and Wilhelm Grimm) were the philologists with interdisciplinary and international perspectives. Unfortunately, few scholars have studied the actual state of their collaboration. In this research project, I attempted to explain this on the basis of their own works, especially by the notes on their folktale collection, but also by their other works and the works of other authors. Above all, the differences of their favorite authors of folktales, the differences of their knowledge about legal history, the differences of their translation policy, and their evaluation from other scholars were elucidated.

研究分野：人文学

キーワード：独文学 伝承研究 比較文学 学問史 思想史 文化研究

1. 研究開始当初の背景

『グリム童話集』は世界的な知名度を持つ。その著者「グリム兄弟」は童話作家と誤解されることが多いが、実際には、彼らは学際的かつ国際的に活躍した文献学者だった。この事実は日本だけでなく多くの国であまり意識されておらず、ドイツ本国でも「グリム童話」を幼稚なものとみなす風潮がある。

グリム兄弟が文献学者であることを常識と見なす研究者のあいだでも、グリム兄弟のそれぞれ、つまりヤーコブ・グリムとヴィルヘルム・グリムが、どのように異なった仕事をおこない、またどのように協力していたのかについては、ほとんど知られていない。彼らの仕事は広大であったから、グリム研究者であっても、詳しく理解している研究者は限られている。

グリム兄弟は、その知名度に反して、「知られざる学問的巨人」と言うことができるだろう。彼らの仕事の実像を探ることで、人文学の歴史の奥行きに光が当てられるだろう。

2. 研究の目的

グリム兄弟の著作で最も知名度が高いのは『グリム童話』である。直訳的に訳すならば、この著作は『子どもと家庭のメルヘン集』（以下『メルヘン集』と呼称）といったところだろうか。

グリム研究者の間でもしばしば等閑視されるが、その『メルヘン集』には、グリム兄弟自身の注釈が付けられていた。この注釈（以下『メルヘン自注』と呼称）は全3版が発表され、彼らの初期のキャリアから最晩年に至るまでのメルヘン観を映しだしている。本研究は、特にこの著作に注目することによって、グリム兄弟ふたりの「協同」のあり方と、ふたりの価値観の共通点および相違点とを浮き彫りにしようとするものである。

考察するのは、『メルヘン集』と『メルヘン自注』はもちろん、兄弟の他の共著、ヤーコブ・グリムの単著、ヴィルヘルム・グリムの単著の全体である。グリム兄弟の『メルヘン集』および『メルヘン自注』は、それらの他の著作物と密接に関連しているからである。

3. 研究の方法

研究方法としては、伝統的な文献実証を採用した。

『メルヘン自注』初版は兄弟の共著として執筆されたが、正確な分担内容は不明のままである。第2版は主としてヴィルヘルム・グリムが担当したが、部分的にはヤーコブ・グリムも深く関与している。第3版はヴィルヘルム・グリムの単著である。この書物の細部の版異同を調査することで、兄弟の協同と、互いの見解の違いやその移ろいを理解することができる。

同時に、グリム兄弟の他の共著（『エッダ翻訳』など）や単著（ヤーコブ・グリムの『ド

イツ法律故事誌』、スペイン語ロマンセ研究など）も重要な検討対象になった。なぜならば、これらの著作は『メルヘン集』初版および『メルヘン自注』初版と同時期の仕事だったからである。これらの仕事を綿密に把握することで、『メルヘン自注』の成立過程と協同のありさまについての理解をふかめることができるのだ。さらに、第3者（特に20世紀の文献学者エルンスト・ローベルト・クルツィウス）によるグリム兄弟への見解を押さえながら、グリム兄弟の仕事の協同のあり方について多面的に考察していった。

2014年夏にはドイツ連邦の首都ベルリンの国立図書館でグリム兄弟の遺稿（未完）を調査することができた。その際に得たさまざまな知見は、それ以後の研究の精度を高める上で大いに役立つものであった。

4. 研究成果

(1) ヴィルヘルム・グリムは、最初の一時期を除いて『メルヘン集』の主たる担当者だった。『メルヘン集』を改版する際にヴィルヘルム・グリムはフランスの先行するメルヘン執筆者シャルル・ペローを参考にしており、『メルヘン自注』ではペローに対する賞賛と批判を同時に表明している。

他方、ヤーコブ・グリムにとってはイタリアの先行するメルヘン執筆者ジャンバッティスタ・バジレが大きな存在感を有していた。ヤーコブ・グリムはバジレの様式を批判しながらも、バジレの仕事の意義の紹介に注力した。

ヴィルヘルム・グリムにとってはシャルル・ペローが、ヤーコブ・グリムにとってはバジレが、それぞれのメルヘン観を特に刺激する先達だった訳である。このような嗜好の違いには、兄弟ふたりの個性が如実に表れている。ヴィルヘルム・グリムにとって優美な様式のシャルル・ペローは受け入れがたい面を持ちながらも、改稿作業の参照枠として魅力的に機能していた。他方、ヤーコブ・グリムにとって官能的で異国情緒に満ちたバジレは反発を感じる対象でありつづけながらも、その異質さはヤーコブ・グリムの知的好奇心をくすぐった。

(2) ヴィルヘルム・グリムによる『メルヘン自注』の「灰かぶり」(「シンデレラ」)論は、錯綜した情報の集合体である。しかし、その主な関心は西洋文学の伝統のなかに「灰かぶり」との共通モチーフとの関連を探ることにあっただと言えるだろう。

他方でヤーコブ・グリムは『ドイツ法律故事誌』で、ゲルマン民族の伝統における「靴」について考察している。それはヤーコブ・グリム独自の「灰かぶり」論になっており、「灰かぶり」が靴を履くモチーフについて、ゲルマン民族の結婚に関する古い習俗との関連がほのめかされている。

ヴィルヘルム・グリムは『メルヘン自注』

第3版執筆の際に、ヤーコブ・グリムによるこの靴の議論を採用していない。ヴィルヘルム・グリムもヤーコブ・グリムの研究内容を知っていたが、兄弟の「協同」はそれほど密接なものではなかったと言えるだろう。

(3)『メルヘン自注』には、古代ゲルマン民族の法や刑罰についての考察が見られる。これは、グリム兄弟ふたりの当初の専門が法制史であったことに関係している。

ところが、ヤーコブ・グリムの『ドイツ法律故事誌』と比較してみると、トピックの共通性は限定的である。『メルヘン自注』を中心に改定したヴィルヘルム・グリムがトピックの重複をあえて避けたというよりは、お互いの協同が密接ではなかったと考えられる。

たとえば「釘樽の刑」と呼ばれる陰惨な処刑方法について、ヴィルヘルム・グリムは、それがゲルマン民族の習俗であったと断言しているが、ヤーコブ・グリムはそもそもこの刑の実在について言及すらしていない。現在の研究でも、この刑の実在はほぼ否定されている。ヴィルヘルム・グリムの法制史に関する知識がヤーコブ・グリムよりも限定的だったことが想像される。

(4)グリム兄弟は『メルヘン集』初版および『メルヘン自注』初版の編集に並行して、『歌謡エツダ』(原文アイスランド語)の校訂と翻訳にも従事していた。

この仕事に関しては、兄弟のあいだで交わされた書簡が多数のこっているために、両者の価値観の相違が分かりやすい。ヴィルヘルム・グリムはドイツ語の自由訳を添付することにこだわり、ヤーコブ・グリムは逐語訳にすら(原文と乖離しているために)懐疑的だった。文献史料そのものを読者に届けることを欲する学究肌のヤーコブ・グリムと、読む楽しみを読者と分かち合いたい詩人肌のヴィルヘルム・グリムの差異と言うことができるだろう。

さらに言えば、ヤーコブ・グリムはやはり同時期にスペイン語ロマンセの校訂にも打ち込んでいたが、刊行された書物は全編スペイン語という体裁だった。ここにも上述した彼の個性がはっきりしている。

兄弟ふたりの個性の違いが、彼らの共著『メルヘン集』および『メルヘン自注』の編纂および改定の背景に横たわっていることを理解すれば、その考察は精度を増す。ふたりの個性の違いについては、さらに、20世紀の文献学者クルツィウスの見解も手がかりとして、整理を試みた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

横道誠「ロマンストとしてのヤーコブ・グリム 古スペイン語ロマンセへの関心」『グリム童話と表象文化—モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』、勉誠出版、2017年刊行予定。

Makoto Yokomichi: „Nigella damascena, Brünhild und Zhang Yunrong. Zur Mehrdeutigkeit des Grimm'schen »Dornröschen«-Märchens“, in: Akten des XIII. Internationalen Germansitenkongresses. Germanistik zwischen Tradition und Innovation. Peter Lanng (Frankfurt am Main), 2017年刊行予定。

横道誠「黒種草・ブリュンヒルド・張雲容「茨姫」とゲルマニスティクの学問史についての考察」、比較民俗学会『比較民俗学会報』36巻3号(通巻165号)、2016年、16-23ページ、査読なし。

横道誠「グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヘン集』 ヤーコブとヴィルヘルムの神話論的研究と現在のジェンダー研究」、『日本ジェンダー研究』18号、2015年、1-12ページ、査読あり。

横道誠「グリム兄弟による『歌謡エツダ』(古ノルド語)のドイツ語訳(その2・完結編)「青年シングルズの歌」を例として」、『研究報告2014/15』(私家版)、2015年、25-45ページ、査読なし。

横道誠「エルンスト・ローベルト・クルツィウスとゲルマニスティク ひとりのロマンストから見たグリム兄弟とヘルマン・グリム」、『研究報告2014/15』(私家版)、2015年、1-23ページ、査読なし。

横道誠「グリム兄弟による「歌謡エツダ」(古ノルド語)のドイツ語訳(その1)「青年シングルズの歌」を例として」、『京都府立大学ドイツ文学会編『AZUR』7号、2015年、21-42ページ、査読なし。

横道誠「話型 ATU410 再考 グリム兄弟の『歌謡エツダ』研究・翻訳から系統仮説へ」、『京都府立大学学術報告・人文』66号、2014年、13-36ページ、査読なし。

[学会発表](計6件)

横道誠「学者としてのグリム兄弟 法、言語、神話、民俗、伝承」、『神戸大学大学院国際文化学研究科国際文化学研究推進センター「近代 神話学 と発展と 神話 機能の展開」プロジェクト、神戸大学(兵庫県・神戸市) 2017年2月23日。

横道誠「黒種草・ブリュンヒルド・張雲容

— < 茨姫 > とゲルマニスティクの学問史についての考察」第 65 回国際学術交流プログラム（愛知大学国際コミュニケーション学会・比較民俗学会共催、三河民俗談話会後援）「口承文藝研究の再考に向けて」愛知大学（愛知県・名古屋市）2015 年 10 月 3 日。

Makoto Yokomichi: „Nigella damascena, Brünhild und Zhang Yunrong. Zur Mehrdeutigkeit des Grimm’schen »Dornröschen«-Märchens“, XIII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG). Tongji-Universität: Shanghai (China), 26. August 2015.

横道誠「ゲルマニストの古スペイン語伝承歌謡集 ヤーコプ・グリムの一側面」説話・伝承学会 2015 年度大会、京都女子大学（京都府・京都市）2015 年 5 月 3 日。

横道誠「ロマニストとゲルマニスティク E・R・クルツィウスの著作におけるグリムへの言及」日本独文学会 2014 年秋季研究発表会、京都府立大学（京都府・京都市）2014 年 10 月 11 日。

横道誠「「マリー」とゲルマン神話 ヤーコプ・グリムの『五日物語』論における性規範・性意識」日本ジェンダー学会第 18 回大会、京都大学（京都府・京都市）2014 年 9 月 20 日。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/mktyokomichi/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横道 誠 (YOKOMICHI, Makoto)

京都府立大学・文学部・講師

研究者番号：6 0 5 1 6 1 4 4

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

河野 眞 (KOUNO, Shin)

金城 朱美 (KANESHIRO, Akemi)

植 朗子 (UE, Akiko)

出口 菜摘 (DEGUCHI, Natsumi)